

アーサー・コナン・ドイル作  
伊豆野 良江訳

## クルンバー館の怪異

The Mystery of Cloomber, by Arther Conan Doyle, Translated by Yoshie Izuno

### 第九章 イースタリング医師の話

次に、イースタリング医師の覚え書きを引用することにしよう。ストランラーで開業医をされている氏は、往診で多忙な中これを書いてくださった。クルンバー屋敷を訪れたのは一度きりということだが、わたしの経験したことを補う重要な証言になると思う。以下、手を加えずに原文そのままを引用する。

わたしのクルンバー館往診の記録を、フォザギル・ウエスト氏に提供できることを光栄に思う。氏にはブランクサムへ来られて以来敬意を寄せているし、ヘザストーン將軍事件のような不可解な事件は、信頼に足りる方法で公にされることが重要だと信じるからでもある。

昨年の九月初めのこと、クルンバー館のヘザストーン夫人から、將軍の健康状態がずっと思わしくないのでぜひ往診にきてもらいたいという手紙を受け取った。

以前からヘザストーン家の奇妙な隠遁生活のことは耳にしていたので、お近づきになれるいい機会だと思い、すぐに屋敷に足を運んだ。

門前に到着すると、以前マクヴィティ氏が住んでいた頃とは、屋敷の印象がすっかり変わっていることに驚いた。客を歓迎するように大きく開かれていた門が、今では堅く閉ざされた上に錠までかけられ、つべんに釘の突き出た高い板塀が屋敷をぐるりと取り囲んでいる。車道には落ち葉が積もり放題で、手入れの跡がなく、屋敷全体に荒廃した雰囲気が漂っていた。

二回ノックすると、ようやく女中がドアを開け、薄暗い玄関ホールを通って小部屋に案内された。そこで待つていたのはやつれた感じの年配女性で、それがヘザストーン夫人だった。その青白い顔、灰色の髪、生彩のない悲しげな目、色褪せた絹のドレス、すべてが屋敷のイメージに似合っていた。

「先生に助けていただきたいのです」夫人は上品な声で静かに言った。「主人は大変な心配事があるって、だいぶ前から神経衰弱になっておりました。新鮮な空気を吸って静

養すればよくなると思って、こちらに越してまいりましたのに、ますますひどくなるよ  
うなのです。今朝がたは高熱を出して、うわごとを言いだしましたので、私も子供も驚  
いて、すぐに先生にご連絡さしあげたのです。では、寝室にご案内いたしますので、ど  
うぞ」

その部屋は、廊下を何度も曲がった一番奥にあった。床には敷物もない殺風景な部屋  
で、家具らしきものは小さなキャスター付きベッドと椅子、そして質素な松材のテーブ  
ルのみ。机には新聞や本がたくさん散らばっていて、その中央にはリネンの布で覆われ  
た大きな物が置いてあり、妙にでこぼこした形をしていた。

四方の壁と部屋の隅には、さまざまな素晴らしい武器のコレクションが飾られていた。  
その多くは刀剣の類で、英国陸軍でも使用している直刀のほかに、多数の東洋製の刀、  
三日月刀、湾刀、そしてククリ刀もあった。鞘や柄には高価な宝石がちりばめた贅沢な  
作りのものが多く、質素な部屋と際立った対照を見せていた。

しかし、そのコレクションを觀賞している時間はなかった。ベッドの病人は一刻も早  
く治療が必要な様子だったから。

將軍はちよつと顔をむこうに向けて、激しい息遣いをし、明らかにこちらには気づい  
ていなかった。そのぎらぎらした目といい、頬の紅潮といい、高熱の兆候を示していた。

ベッドに近づき、屈みこんでその脈を取ろうとしたときだ。病人はがばつと起き直ると、  
狂ったように殴りかかってきた。わたしはこれほど恐怖にゆがんだ顔を見たことがない。

「放せ！放さんか！」病人は叫んだ。「わしに触るな！わしの人生を滅茶苦茶にした  
のに、まだ足りんのか！いつまで苦しめれば気が済むんだ！」

「あなた、あなた、落ち着いてちょうだい！」夫人はなだめるように言つと、冷たい  
手を將軍の額にあてた。「こちらはイースタリング先生ですよ。ストレンラーから治療  
しに来てくださったんじゃありませんか」

將軍はぐつたりと枕に頭を落とした。さつきとは表情が打って変わり、譫妄状態を脱  
して妻の言葉も理解したようだった。

わたしは脇の下に体温計を差し込んだ。脈拍を調べると百二十、体温は四十度。これ  
は、弛張熱という熱帯地方に長くいた人がかかる病気の症状と思われた。

「心配はいりません。キニーネと砒石を少々服用すれば、すぐによくなりますよ」  
「心配いらんだと？」將軍は言った。「ああ、死ぬ心配なんかないさ。』さまよえるコ  
ダヤ人』みたいに永遠に呪われているんだからな。メアリ、もう頭ははつきりしたから、  
先生と二人きりにしてくれんか」

夫人は渋々部屋を出て行った。わたしはベッドのそばに腰をおろし、相手が話し始め  
るのを待った。

「肝臓をみていただきたい」ドアが閉まると、將軍は言った。「以前そこに腫瘍があ  
ったんでね。軍医には、十中八九肝臓がもつて死ぬと言われました。インドから帰って  
きてからは、そんなに具合悪くはなかったが……。肋骨の端の下の、ここら入んです」

「ああ、ここですね」わたしは丁寧に診察してから言った。「でも、幸い腫瘍は完全に吸収されたか、石灰化したようです。単発性腫瘍にはよくあることですよ。今は何の問題もありません」

それを聞いても、将軍は浮かない顔のままだった。

「いつもそうだ。普通、高熱で譫妄状態になったら命の危険にさらされるのに、わしの場合は大丈夫とくる。この傷を見てくださらんか」将軍は胸をはだけると、心臓の上あたりにある窪んだ傷跡を見せた。「民兵の銃弾の跡です。絶対助からんはずだが、肋骨に当たって弾がそれ、背中に抜けた。だから胸膜に傷がつかなかったんですな。そんな話、聞いたことがありますか？」

「幸運な星のもとに生まれただんですね」わたしは笑顔で言った。

「それは考えようですな」将軍は首を振って言った。「普通の死に方ならちつとも怖くない。だが、何か奇妙で不可解な死に方をする気がして、恐ろしくてたまらんです」「つまり、暴力による死より自然死を望まれるということですか？」わたしはとまどって言った。

「いや、厳密に言つとそついう意味ではないんです。冷たい鋼の刃や弾丸には慣れておるから怖くないが…。先生は動物磁気についてはご存じですか？」

「いいえ、知りません」将軍がまたうわ言を言い出したのではないかと、その顔を観察した。しかし、意識ははつきりしているようだし、頬の赤味も消えている。

「なるほど、西洋医学はこの方面ではだいぶ遅れておるわい。物質的、肉体的な面での研究は進んでおつても、こと自然の神秘的な力とか、精神の潜在能力とかに關しては、インドの卑しいクーリーの足元にも及ばん。長い間の肉食と怠惰な習慣のせいで、動物的本能が精神力より勝ってしまったというわけですな。魂の道具であるはずの肉体が、魂を閉じ込める牢獄になっておる。東洋では魂と肉体がむしろほど結合しておらんで、死がそれを分離しても、はるかに苦痛が少ないんですよ」

「でも、そついう特殊な体質であることが、なにかの役にたつんでしょうかね」信じられない思いで聞いた。

「深遠な知識を得ることが出来る。インドに行つて最初に目につくのは、マンゴー手品というやつだ。先生もご存じだと思つが、マンゴーの種を蒔いて手をかざすと、みるみる芽が出て、葉が付き、実がなる。それも三十分もたたないうちに。あれは手品などではなくて、力ですな。連中はティンダルやハクスレーなどといった科学者より、よっぽど自然がわかつておる。われわれの想像もつかんような靈妙な方法で、自然現象を早めたり遅らせたりできるのです。こついう下層カーストの手品師は素人のようなもんだが、さらにその道に精通した者ともなれば、われわれなどホッテントット人やパタゴニヤ人並の知識しか持つておらん」

「そついう連中とお知り合いのような口ぶりですね」

「そつ。思いもつかんようないきさつで知り合つたのです。おかげでとんでもないこ

とになってしまいましたね。だが、動物磁気のことは多少とも知っておかれるべきですぞ。学問的にも将来性のある分野ですから。ライヘンバッハの『磁気と生命力に関する研究』とグレゴリーの『動物磁気学』はぜひお読みになるといい。それに、メスマルの『二十七格言集』とヴァインスベルクのユスティヌス・ケルナー博士の著作も。大いに知識を深めてくれますぞ」

自分の専門分野のことで余計な忠告をされて、少々不愉快になり、わたしは何も言わずに立ち上がった。最後にもう一度脈拍や熱をみると、さっきの高熱が嘘のように引いていた。これはマラリヤの症状の特徴である。

わたしは、熱がなくなってよかったですねと將軍に声を掛けてから、手を伸ばしてテーブルの手袋を取ろうとした。そのとき、すっかり中央の物にかかっているリネンの布まで持ち上げてしまった。

もし、將軍が血相を変えて叫び声を上げなければ、自分のしたことに気づかなかつたかもしれない。あわてて布を元に戻した瞬間、ウェディングケーキのような物が目に入った。

「なに、かまわんよ。隠すようなもんじゃない」わたしがわざとやったのではないことを知って、將軍は表情を和らげ、手を伸ばしてリネンの覆いを外した。

それは山脈の精巧な模型だった。雪を頂いた山頂は、確かにウェディングケーキに似ていなくもなかった。

「ヒマラヤ山脈の一部で、インドからアフガニスタンに続くスリナム支脈ですよ。実によくできておる。わしが初めて戦った場所で、特別な思い出があるのです。一八四一年の夏、わしはこのカラバーとトゥール谷の反対側の山道で、護送隊の擁護やアフリディ人たちの統制の任務にあたっていた。これがえらく厄介な仕事でした」

「では、ここで戦闘があったのですね」わたしは山道の片側に付けられた赤い点を指さして言った。

「そつ、そこで小競り合いがあった」將軍は身を乗り出して、赤い点を見つめた。「わしらは襲撃されて……」

突然、將軍は銃撃されたように枕にくずおれた。その顔には最初部屋に入ったとき見たのと同じ恐怖の表情があった。と、同時に、ベッドの真上からチンチンという鋭い音が聞こえてきた。自転車のベルの音に一番近いかもしれないが、明らかにそれとは異なっている。後にも先にも、あんな奇妙な音は耳にしたことがない。

わたしは驚いてあたりを見回してみたものの、どこから音がしているのか見つけることはできなかった。

「いや、何でもない。わし専用のベルでしてな」將軍は青ざめた顔で無理にほほえもうとした。「さてと、では下のダイニングルームで処方箋を書いてくださらんか」

將軍はわたしを追い出したがっているようだった。わたしとしては、あの首の正体をつきとめたかったのだが、仕方なく部屋をあとにした。

わたしはこの患者にひどく興味をかきたてられた。そして、再びこの家を訪ねて、いったいどんな事情があるのか探ってみようと、帰りの馬車で心に決めたのだった。しかし、残念ながらそれは果たされることはなく終わってしまった。その晩、將軍から手紙が届き、おかげですっかり回復し、もう往診の必要がなくなったという文面とともに、一回の往診料としては多すぎる報酬が同封してあったのだ。

そして、これが將軍から受け取った最初で最後の手紙だった。

今度の事件に興味を持った人々から、將軍は狂っていたのではないかとたびたび聞かれるが、正気だったと断言することができる。それどころか、読書家で思慮深い人物だという印象さえ受けたくらいだ。

しかし、一回診療しただけでも、体には反射作用の衰弱、角膜混濁、動脈硬化症があり、いつ病状が急変してもおかしくない兆候を示していたのである。

## 第十章 クルンバー館からの手紙

別な角度からの補足はここまでにして、再びわたし自身の体験を語ることにしよう。ご記憶だろつと思うが、ルーファス・スミス伍長と名乗る野卑な男が到着した日まで話を進めてきた。これは十月初めの出来事で、イースタリング医師がクルンバー館を訪問したのは、それより三週間以上前のことになる。

將軍に密会の現場を見つかつて以来、ガブリエルにもモータントにも会えず、わたしはずつと辛い思いをしていた。二人が監禁状態にあるのは疑いようもなく、自分たちのせいでそんなことになつたと思うと、妹もわたしもなおさら胸が締め付けられる思いだつた。

ところが、將軍と最後に話してから二、三日後に、モータントから手紙が届き、胸をなでおろしたのだつた。届けてくれたのは、みずばらしい服を着た漁師の子供で、クルンバー館の門前で老婆 たぶんコックだろつ に手渡されたということだつた。

### 前略

ずつとご無沙汰したままで、さぞご心配をおかけしていることと思うと、ガブリエルもぼくも心苦しくて仕方ありません。実は、家から一步も出られる状況ではありませんでした。強要されたわけではなく、そうせざるを得ない事情があつたのです。

日に日に父は神経を高ぶらせて、十月五日までは外出しないでほしいとぼくたちに懇願するので、それ以上父を刺激しないために、外出しないことを約束するしかありませんでした。そのかわり、あと一週間して五日を過ぎれば、どことなり好きな所に出かけていいという許しを得たので、ぼくたちはその日が来るのを待ち焦がれています。

ガブリエルからお聞きだと思いますが、父はその日に恐怖が頂点に達し、その後は人が変わったように落ち着きます。そして、今年はいつも以上にぼくたち家族の上に災厄が降りかかつてくる恐れがあるらしいのです。父がこんなに怯えて嚴重な警戒をするのを見たことはありません。手は震え、腰は曲がった今の父の姿から、象に乗って狩りをする連中を腰抜けと笑い、テライのジャングルに踏み入って虎を仕留めた父を、誰が想像できるでしょう。

ご存じのとおり、父はヴィクトリア十字勲章を授かりましたが、それはデリーの市街戦の手柄によるものです。それが今や、世界一平和な片田舎で、ちよつとした物音にも震え上がる。何と哀れなことでしょう！以前お話ししたことを忘れないでください。その危険というのは妄想ではなく、間違いない現実のもので、避けることも言葉にすることもできないような危険なのです。すべてが順調にいけば、六日に妹とブランクサムに伺います。

かけがえのない友人であるお二人へ

モータントより

この手紙によって、二人が監禁されていないことがわかり、わたしたちはほっとした。その半面、我が身以上に大切な人たちの身に危険が迫っているのに、どんな危険かもわからず、手をこまねいているだけの自分たちに唇をかむ思いだった。

いったいその危険はどこから迫ってくるのだろうか。自分にも妹にも絶えずそう問いかけてみるものの、考えれば考えるほど謎は深まるばかり。お互いの経験やクルンバー館の人々の言葉をあれこれつなぎあわせて、意味を見出そうとしてみたが、何の助けにもならなかった。

ついに疲れ果てると、わたしたちはこの問題を忘れようとした。そしてあと数日すれば、この拘束が解けて友人たちの口からじかに聞けるのだからと、自分を慰めたのだった。とはいっても、その数日は果てしなく長く思われたが。

そこに、あの思いがけない出来事が起こり、すっかりわたしたちの関心を奪ってしまったのだ。